

LIGHT OF LOVE

Overseas Project for the Blind - Plans and Reports

No.11 1996. 7

愛の光通信

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局



ビレンドラ・ネパール国王より王章を受ける井口理事
カトマンズ・ナラヤニティ王宮にて

鍼灸・マッサージの技術移転を目指して

海外援護担当理事 井口 淳

わが国では「あん摩さん」といえば「盲人」というイメージが脳裏に閃くほど、あん摩・マッサージ師が盲人の職業に直結していた時代があった。しかし最近では、この印象がすっかり変化し、晴眼者と盲人のあん摩・マッサージ師の比率が逆転している。晴眼者が約70パーセント、盲人が30パーセントを占める時代になってきたのである。

なぜ、そうなったかは別として、あん摩・マッサージ業が、昭和20年ごろまでは、盲人の職業としてある程度確立していたことは確かである。逆に言えば、昔は盲人の職業としては「あん摩師」と「箏曲家」くらいしかなかったということである。しかし近年、科学が大きく進歩してコンピュータ時代となり、電話なども予想以上に発展普及、電話交換手やプログラマーなど、盲人にも新しい職域が開拓されてきたことから、「あん摩師」即「盲人」というイメージが薄くなってきたのである。また、あん摩・マッサージの治療で家庭を訪問する場合、晴眼者はバイクや車ですぐに訪問できるという利点があるが、盲人は、表札もわからず、危険なものがある場合は手引きを必要としたりするので、家庭訪問が難しいことなどで敬遠されるようになったことも、一つの要因といえるかもしれない。とにかく、時代の推移は科学の進歩とともに人間社会も大きく変化させている。

ネパール王国は1963年、ヒンドゥ教制法を廃止し、カースト制度を廃止したが、ヒンドゥ教を基盤とする社会風習は、実質的にカースト制を存続させてきた。しかし、1990年の民主革命によって新憲法が制定され、この中でカーストによる差別撤廃が明文化された。これにより、特に都市部においてはカーストの実質的な意味は薄れつつある。このことは、医療としての鍼灸・マッサージにおいて、カーストの上下に関係なく、施術を保証するものであると思われる。

これまで、当協会のネパール王国盲人援護事業の一つとして、農業や家畜飼育、雑貨店経営などによって盲人の自立を促すプログラムを行ってきたが、いずれも、家族や晴眼者の補助を必要とした。そこで、盲人が補助を必要とせず、単独で生



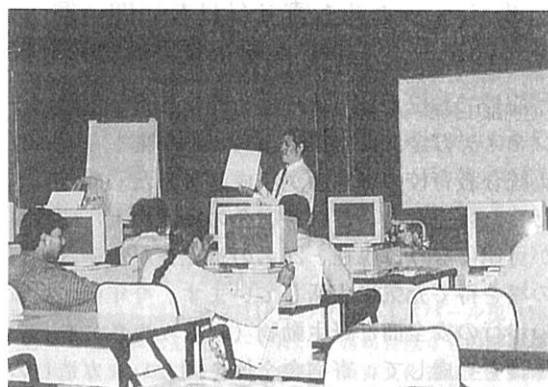
第三次協定書にサインをする井口理事

計を立てるためには、かつての日本のように、鍼灸・あん摩・マッサージ業を行うのがよいのではないかとの観点から、昨年11月末から12月上旬にかけて、調査団を派遣したのである。日本国において衰退しつつあるものを、何故、ネパール王国で実行しようとするのかと疑問を抱く人もあるようだが、日本の段階まで到達するには、ネパールの社会基盤は数段階上らねばならない。たとえば、医学的知識にしても日本の明治時代以前であると言える。まず、そうした点を解消するにはネパール王国の隅々までの教育レベルの上昇を図らねばならない。とにかく、年月をかけて一步一步、衛生学をはじめとする科学などを積み上げる必要がある。

このために、土間に放任されている盲児に教育を施し、その盲児に衛生観念を持たせ、鍼灸・マッサージを通して、一般社会の健全者に普及するようにはどうか。それには、あん摩・鍼灸学を教育しながら、衛生観念を植え付けることから始めるべきではなかろうか？ 調査団の報告にあるように、国立医大病院にも医療マッサージ師がいないのである。この医療マッサージも、ネパールの盲人の職業として開拓してもよいのではなかろうか？ ネパール盲人の職業として、鍼灸・マッサージの技術移転を可能にするため、いろいろな角度からの地道な積み重ねが必要であると考えている。

アジア諸国に対するパソコン点訳の技術指導

日本点字図書館館長 田中 徹二



私が国際協力の意義を実感したのは、東京ヘレン・ケラー協会がネパールの視覚障害者に対する国際協力事業を始めるにあたって、カトマンズ、ボカラを訪れた時であった。私は、寺の1室でネパール盲人福祉協会（NAWB）の役員から、また、宿舎にしていたペンションに訪ねて来られた人々にネパールの視覚障害者問題を聞き、ヘレン・ケラー協会が何ができるかを話し合った。障害者施設や視覚障害児を受け入れている統合教育校を訪れ、施設職員やリソース・ルームの先生、子どもたちとも話し合った。そんなことを通して、私には何をすべきかが見えてきたように思う。

その後、ヘレン・ケラー協会の海外援護事業は順調に発展し、現在ではすっかりネパールに根付いている。NAWBとの協力関係も完全に安定し、点字教科書は全国に行き渡り、視覚障害児の就学率は一気に高くなった。

こんな進展を横目に見ながら、私は日本点字図書館で図書館としてできる国際協力について考えてきた。図書館のノウハウを活かせる協力単に援助物資を贈るだけでなく、人的な交流を含む技術交換のようなことができないか、それが私の願いだった。

国際障害者年の10年が終わり、E S C A Pによる「アジア・太平洋障害者の10年」が始まったのを契機に、「アジア盲人図書館協力事業」を発足させた。初年度の1993年には、E S C A P加盟国のうち、O E C Dの経済援助国を対象に質問紙法によるアンケート調査を実施したほか、マレーシア、インドネシア、タイ、バングラデシュの4か国を訪問、現地の実状を視察した。

その結果、マレーシア盲人協議会と手を携え、毎年クアラルンプールで「パソコンによる点訳技術指導ワークショップ」を開催することになった。トレイニーは10人、それぞれに1台のパソコンを用意し、ワークショップが終了した後、所属する施設や学校に持ち帰って点字資料の製作に取りかかってもらう。拠点に点字プリンタを置いて、パソコン点訳したデータを点字用紙に印字し、必要とする視覚障害者に渡す。そんなシステムを確立するために、パソコンは現地で調達、点字プリン

タはアジアの紙事情に適したエベレスト（スウェーデン製）、点訳ソフトはダックスベリー（アメリカ製）を購入することにした。数百万円かかる開催費用は、日本点字図書館ではとても賄えないので、94年度は民間助成団体、95年からはヘレン・ケラー協会と同じく「国際ボランティア貯金」から援助を受けている。

今年も12月、マレーシア国立図書館を会場に、土・日休みなしの丸9日間のワークショップを開くが、参加者はマレーシア国内各地をはじめ、インドネシア、バングラデシュ、ベトナム、タイに広がっている。フィリピン、ブルネイなどからも参加申し込みが来ており、今後少なくとも10年はワークショップを続けていかなければならないと考えている。

ヘレン・ケラー協会から学んだ国際協力が、ネパール以外のアジア各国でも花開くように、今後も地道な努力を続けていくつもりだが、助成金の確保には常に悩まされることになる。この分野へのODAの導入が今検討されていると聞すが、ぜひ実現することを大いに期待したいところである。

田中徹二氏は、当協会が1985年、第一次ネパール盲人福祉調査を実施した時の調査団長であり、87年の統合教育に関する第二次調査にも調査員として加わっている。第一次・第二次調査を踏まえたネパールの盲人福祉に関する提言は、現在の当協会の活動方針であり、田中氏をはじめとする調査員の果たした役割は大きい。田中氏は、現在JICAの「障害者の国際協力事業への参加」調査研究検討委員会メンバーとして活躍中。

フィールドワーク・レポート

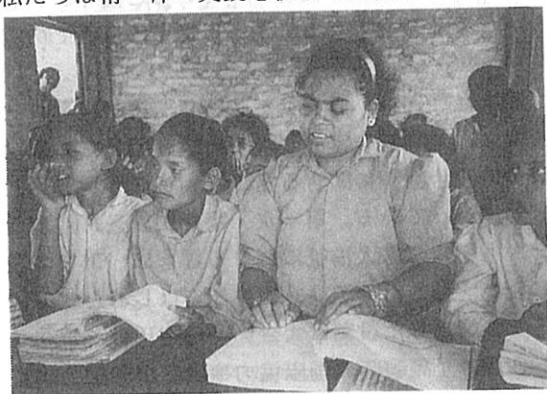
♫ ジャッカルも寄せ付けない囲い堀 ☺ ドゥマルワナ統合教育校

前号でお伝えしたように、昨年5月「国際ボランティア貯金」の支援によってバラ郡ドゥマルワナ統合教育校の寄宿舎が完成しました。昨年12名だった盲児童も、この寄宿舎の完成によって増員が可能になり、現在、20名の盲児童が快適な学習の場を得て元気に生活しています。今年は、児童の歩行の安全面と野生動物（ジャッカル）からの保護を考慮して、寄宿舎全体を囲むレンガ造りの堀を建設しました。これで万全です。

この学校は、私たちがバラCBRの一環として支援している統合教育の拠点校です。昨年の11月と今年の6月、2回にわたって訪問し、校長先生や統合教育担当教師との懇談、盲児童との交流、クラス見学を通して、教育や生活上の問題点などを把握し改善を試みています。

今回の訪問では、点字教科書の配布が遅く困っているとの指摘を受けました。これは由々しきことなのですが、教育省によって教科書の改定が矢継ぎ早におこなわれており、改訂版点字教科書が配布されて2～3カ月後に、再改定がおこなわれるという理不尽な教育政策によるものと思われます。こうした事態に素早く対応するのは困難なことなのですが、努力するようNAWB出版責任者に申し伝えました。

盲児童たちの将来に対する希望は、やはり先生になること。彼らは屈託がなく、笑顔がとてものです。彼らの希望を打ち砕かないためにも、私たちは精一杯の支援を続ける必要があります。



英語の点字を読む4年生の盲児童—ドゥマルワナ校



寄宿舎で語らう盲児と寮母—ジュダ校

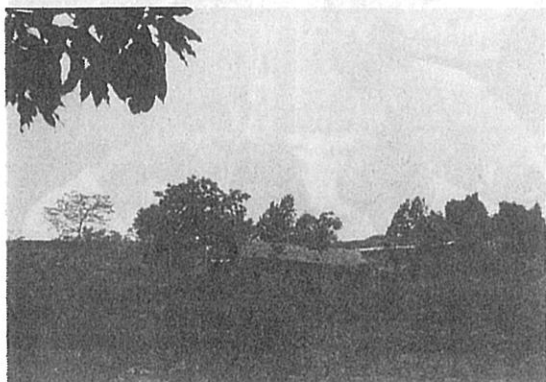
● トタン屋根の寄宿舎 ☺ ジュダ統合教育校

ジュダ校は、今回6月の訪問日程には入ってなかったのですが、偶然NAWBのオフィスで同校の校長先生に出会い、視察を決定しました。同校は、現在当協会が支援している統合教育校のなかで、最も劣悪な寄宿環境にあります。今年4名の女子を受け入れたため、女子寝室が新たに設けられましたが、依然、寄宿舎全体は倉庫ようです。屋根はトタンで、もちろん扇風機などありません。

同校は、南部タライ平野の、さらにインド国境寄りのゴールという町にあります。この地は雨季前の4・5月から乾季に入るまでの時期は、湿度が高く気温が40度にも上がります。その上、雨季になると洪水によってたびたび浸水します。今回の訪問は、雨季に入りかけた6月初旬でしたので、トタン屋根の寄宿舎は蒸し風呂のようでした。そのせいか、盲児童たちの行動にも、もうひとつ活気が感じられませんでした。彼らにとって、この寄宿舎で点字の勉強をしたり、日常生活を送るのは大変厳しいことです。今年、寄宿舎建設のリクエストを受けましたが、予算の関係で実現できませんでした。しかし、扇風機と屋根の改造くらいは、早急に整備する必要があります。

校長先生は、タライ地方での、女子に対する教育軽視の風潮を批判し、女子も男子同様、教育を受けることが重要であり、それは障害者に対しても同様であるということを強調し、今年4名の女子を就学させた経緯を熱っぽく語ってくれました。

現在24名の盲児童が就学を希望しているとのことでしたが、収容能力がないため待機中です。新寄宿舎の建設を急ぎ、盲児童たちをトタン屋根から解放しなければなりません。



ゴルカの山の頂にあるジャンタ校

● 山の上の学校 ●

ジャンタ統合教育校

「ゴルカ」と言えば「山岳地帯」と即座に答えられる人はネパールへ行ったことがある人。このゴルカ郡の山の中に、私たちが昨年10月から支援を開始したアマル・ジョティ・ジャンタ統合教育校がある。パラC B Rのフィールド・ワークを終えた私たちは、同校を訪れるべくゴルカへ向かった。幹線道路の分岐点である宿場町ムグリンで宿を取る。早朝6時、ジープを駆って、山道への登り口である吊り橋まで移動、の予定であったが、前日の雨で道は至るところぬかるんでおり、ジープが前に進まず。止むなく、ジープを捨て歩いて山道への登り口へ。

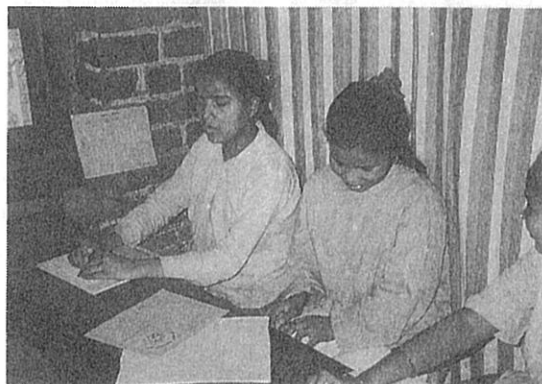
6月初旬といえばネパールは雨季に入りかけた時期、夕方必ずといっていいほど雨に見舞われる。この雨が日本の梅雨とは違い、まさに暴風雨。突然、砂塵交じりの風が吹きはじめたかと思うと空が真っ暗になり、大粒の雨が空から落ちてくる、といった状況。台風としか言いようがない。

谷を越え、川を渡り、歩くこと3時間。都会生活で歩くことを忘れてしまった私たちの体は、6月の酷暑の中での山歩きには向いてはいない。疲れきった体がたどりついたのは、山の頂の学校だった。そして待っていたのは畠博之氏。何ともうれしい再会ではないか。同じような光景が、実は9年前にもあった。

87年3月、私たちはネパールの統合教育調査のため各地を回り、その一環として、当時ネパール教育協力会(JECS)がボランティア教師を派遣していたゴルカのサラスワティ小学校を訪れたことがある。その小学校に派遣されていたのが畠氏である。彼はゴルカに派遣されるまで大阪府立盲学校で教鞭をとっていたため、その後、統合教育の研修などで協力してもらうこととなった。以来、彼はゴルカ郡で土地の人と同じ生活を営み、郡内40校のネットワークを基盤に、教育プログラムを実践しているすばらしい人材である。

さて、そのジャンタ統合教育校であるが、盲児童は15名。男子寄宿舎は教室を利用している。女子の寄宿舎とリソースルームは、以前は教会だった。9名の盲児童が点字の指導を受けていたが、先生も生徒も真剣そのもの。担当教師は、教科書以外の教材を、自分で考案しなければならないこと、一度に多くの盲児童が入学したため一人一人に対応に戸惑っていると漏らしていた。熱意の現れだと思う。興味を引いたのは、8年生の社会科の授業。社会科は教科書を生徒に読ませて授業を進めているようであったが、8年生の盲生徒は点字のテキストを開いていない。教科書はどうしたのかと尋ねると、寄宿舎に置いてあるという。彼の学習法は教室で他の生徒が読むのをじっと聞いて記憶し、寄宿舎に帰ってから教科書のその部分を読み理解するのだという。是非はともかく、ネパールの教育レベルと視覚障害者の利点とが見事に合致した一場面であった。

夕刻の嵐を避けるため早目に山を下る。ホテルに着くや否や、雷を伴った凄まじいスコール。雨上がりの緑が目染む、6月のゴルカであった。



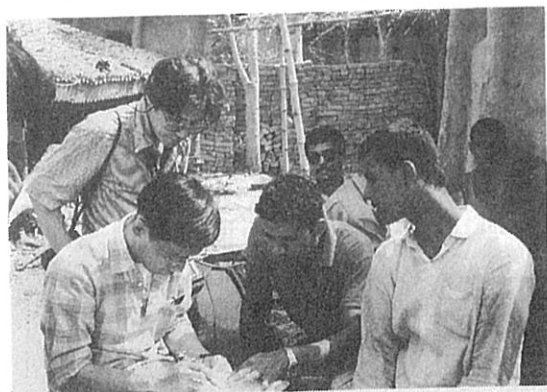
寄宿舎で点字の勉強をする盲児童—ジャンタ校

C B R と地域福祉

近年、日本でも地域福祉という言葉が盛んに使われるようになりました。ネパールで私たちが行っている視覚障害者のC B Rも、まさに地域福祉の一形態です。C B Rとは、地域社会を基盤としたリハビリテーションのことで、地域社会が障害者を平等に受け入れる状況をつくりだし、障害者がその地域社会の中で自立した生活を営むことができるようになることが目標です。特にアジアの後開発国で、障害者の9割もが農村地域に住むネパールのような国では施設を中心とした先進国型のリハビリテーションでは、多くの障害者にサービスを提供することは不可能であり、その効果も期待できません。

私たちはバラ郡で1989年よりC B Rを開始、現在バラ郡全域の視覚障害者を対象にプログラムを展開しています。バラ郡は、ネパール南部、インド国境に沿って広がる亜熱帯の典型的な農村地帯ですが、その昔はマラリヤが蔓延するジャングル地帯で、今でも衛生状態の悪い地域です。広さは東京23区部の二分の一。この地は、栄養障害（ビタミンA欠乏症）、トラコーマ、白内障などによる失明が後を絶たず、ネパールの中で最も失明率の高いところとして知られています。

私たちは、バラ郡全域の個別調査を行い、105カ村、409,141人(67,943世帯)のうち、視覚障害者684人、失明予備軍である白内障、その他の眼疾患患者合わせて23,024人を見いだししました。C B Rの特長は、すべてがコミュニティ主導で運営され、地域のあらゆる資源を活用することです。活動の



評価活動を行う事務局スタッフーバラ郡にて

プロセスを要約するとーC B R現地協力委員会を組織→フィールドスタッフの選抜と集中訓練→巡回訪問による障害者の実態調査およびデータ作成→個々の状況に応じた在宅訓練の提供ーとなります。具体的には、カウンセリング→歩行・日常生活訓練→職業訓練と自活資金貸付による自立です。

現在、フィールドスタッフ13名が自転車を駆使して集落を巡回し、視覚障害者の訓練と指導に当たっています。彼らは自らの生まれ育った地域を変革しようとする熱意に溢れた若者で、それぞれ担当する地域から選ばれています。このことはC B Rにとって重要な要素です。なぜなら、彼らにその地域の言語、習慣、土地柄に精通し、そこに住む人々の痛みを共有しているからです。また、知識のない家族や周囲の村人に対して、教育や訓練の必要性を説き、さらには協力を求めなければならないからです。

この地域におけるC B Rはすでに7年が経過しました。職業訓練を終えた129名の視覚障害者が自活資金貸付プログラムによって、水牛や山羊などの家畜飼育、野菜栽培、竹籠づくりなどで生計を立てるに至り自立の道を歩み始めています。

また、バラC B Rの一環として失明予防プログラムも行っています。私たちは1991年眼科診療所を備えたバラC B Rセンターを現地コミュニティと共同で建設しました。この診療所は巡回眼科医による月1回の診療と眼科助手による毎日の診療を無料で実施しており、年間5,500名の患者を受け入れています。地域住民は診療所が開設されるま



縄編みをする盲人ーバラ郡・バリランブル村で

は、近隣に病院もなく、病院にかかるお金もなく、放置されたままの状態でしたが、今は自由に診察を受けることができるようになりました。

また、バラC B Rは、定期的に失明防止講習会や学校巡回検診、幼児を対象にしたビタミンA配布もおこなっており、私たちの先駆的プロジェクトは、政府主導の全国ビタミンA配布プロジェクトとして定着しました。このように、この地から失明を根絶するための努力がコミュニティベースで続けられています。

私たちの活動は総合的なプログラムへと成長しています。特筆すべきは、農村地域で何もできないと思われてきた障害児が健常児と遜色なく学び、社会の片隅に追いやられていた青年が仕事を持って自立し始める現実を目の当たりにして、家族や

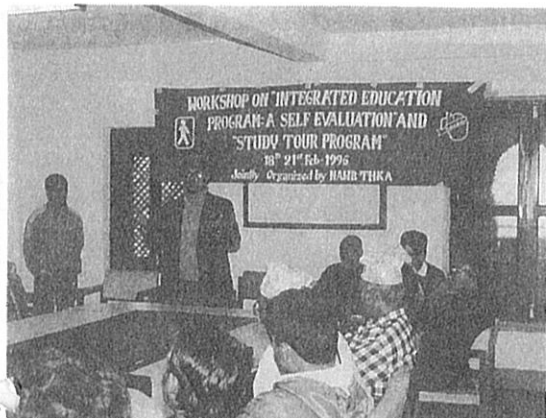


灌漑用井戸掘りをする盲人—バラ郡・アムリットガンジ村

周囲が自らの考えを変えていかざるを得ないことです。このことは単に障害者の自立に止まらず、地域社会全体の改革を促す契機ともなっています。

統合教育担当教師研修

6週間（2月25日～4月5日）の日程で、統合教育担当教師研修がネパール盲人福祉協会（NAWB）で行われました。研修生は、統合教育開始予定の各学校の先生4名。講師はNAWBの事務局局長および各担当スタッフ他、長年統合教育に関わってきた担当教師など合わせて10名。研修内容は、統合教育概論、英語・ネパール語・サンスクリット語の点字講習、数学記号や図形に関する指法、歩行・日常生活訓練、体育の指導法など。最後の5日間は、教育実習として統合教育校での現場研修。研修生は修了証書を携えて、それぞれの学校へ戻り、統合教育開始の準備に取りかかりました。この研修はネパールの統合教育推進・拡充にとって最も重要なプログラムです。



研修会で挨拶するルバケティNAWB会長

全国統合教育研修会

2月18日から21日まで、NAWB本部において統合教育の質的向上を図るための標記研修会が開催されました。本研修会は、この数年毎年開かれているもので、これまでは担当教師を対象に教育技術に関する研修を実施してきましたが、今回は校長、副校長に対する指導者研修が行われました。

予算、運営、教務に関する各学校の報告を踏まえて討論を行い、現状分析結果を「統合教育推進基本書」としてまとめ、政府に提出しました。

1996年 理事長交替のお知らせ

当協会は6月10日、理事の任期満了に伴い、役員改選の理事会・評議員会を開き、新理事長に毎日新聞社会事業団前常務理事の堀込藤一を選任しました。

元常務理事・西山隆夫氏ご逝去のお知らせ

当協会元常務理事・西山隆夫氏が、5月14日88歳で亡くなりました。故人は毎日新聞社地方部長、航空部長などを歴任。退職後は当協会の常務理事として活躍されました。同時に、中途失明者の鍼灸・マッサージ師養成校であるヘレンケラー学院の学院長も務められ、生徒から大変慕われた人格者でした。ご冥福をお祈りいたします。



点字出版技術研修

1996年1月10日～4月7日の3カ月間、ネパール盲人福祉協会(NAWB)教育・点字印刷課長キラン・パウデル氏を当協会に招いて、点字出版技術研修を行った。

キラン氏が点字出版部門の責任者ということで、英語点字の略字、点字製版、機器の保守・点検、製本技術を中心に研修を行った。また、統合教育の担当責任者でもあるため、日本における盲学校を中心に、視覚障害関連の施設見学なども実施した。

研修は、当協会の就業時間に合わせて午前10時～午後6時までおこなった。また、6時から日本語会話の学習も行った。彼は持ち前のクールさで、言葉や文化の違う日本での生活にもすぐ順応し、一日も休むことなく予定の研修を全て消化した。研修の中で最も時間を費やした英語点字略字と製本では、驚くほどの成果を上げた。研修の最終段階では、パソコンを使って英文の点訳に挑戦し、学んだ製本技術を完全駆使して、一冊の本を完成させた。

キラン氏、ハイテクや動植物に非常に興味があり、当協会でおこなった録音技術研修や京都ライトハウスの自動製版システムに強い関心を示していた。また、アイ・メイト協会の見学では、アイマスクをかけ実際に盲導犬歩行訓練を体験、筑波大学付属盲学校での教師を対象にした地学、生物の公開講座では、積極的に実験に取り組んだ。

本研修は、過去2度にわたって実施されており、その成果は非常に大きく、ネパールへの点字出版技術移転にとっても、視覚障害児教育のレベル向上にとっても欠かすことのできないものである。

技術研修と日本での生活

ネパール盲人福祉協会 キラン・パウデル

1996年1月10日から4月7日までの約3カ月間、私は、研修生として東京ヘレン・ケラー協会(THKA)に招聘されました。この間、THKAのスタッフは言葉では言い表せないほどのすばらしい点字出版技術を教えてくれました。

来日直後、日本語がほとんどできない私は、大きな戸惑いを感じていました。でも、THKAのスタッフが、ゆっくりとやさしい日本語で私に話しかけてくれたので、わたしの未熟な日本語でも研修に大きな支障はありませんでした。

研修開始以来、印刷課に最もよく足を運び、さまざまな研修を受けました。中でも製本技術研修が最もためになりました。なぜならTHKAの製本技術は、NAWBと比べ、とても進歩していたからです。さらに印刷課のスタッフは懇切に私にその技術を指導してくれました。休憩時間は、いつも印刷課のスタッフとお話しをして過ごしました。そんな時、彼らは楽しいジョークで私を笑わせリラックスさせてくれました。製版技術研修と英語2級点字研修も、リラックスした雰囲気の中で受けることができました。また、NAWBは、テープ図書制作のためのスタジオを整備する計画があるため、将来に備えてTHKAは、1週間の録音技術研修を施してくれました。私にとって全く初めて習得する技術で、とても興味深いものでした。また、将来のNAWBのことを考えると、とても重要な研修だと思いました。同研修の中で、ミキシングがかなり複雑でしたので、



製本技術研修中のキラン氏

研修内容(1996年1月10日～4月7日)

- ① 点字製版 ② 英文点訳(英語点字略字)
- ③ 点字印刷 ④ 製本 ⑤ 海外援護実務研修
- ⑥ 録音技術研修 ⑦ 日本語学習
- ⑧ 施設見学
 - ☆ 国際視覚障害者協会(1/13)
 - ☆ 国立身体障害者リハビリテーションセンター(2/8)
 - ☆ アイメイト協会(2/14)
 - ☆ 筑波大学付属盲学校(2/21、2/23)
 - ☆ 京都ライトハウス(4/4)
 - ☆ 毎日新聞社点字毎日(4/5)
 - ☆ 大阪ライトハウス(4/5)



スタジオで録音技術の研修を受けるキラン氏

この技術習得に最も全力を傾けました。日々の研修は忙しく、毎朝10時から夕方6時まで行われました。さらに6時から、日本語の会話レッスンをマンツーマンで受けました。

また施設見学の際、施設の清潔さと職員たちの真剣な勤務態度には驚かされました。ネパールと違って、ほころのない施設環境の中、楽しく見学できました。どの施設も大変興味深い事業を行っており、視覚障害者にとって決して欠かすことのできないものばかりでした。

私はヒンズー教徒ではありますが、私自身ヒンズー教に対するこだわりや信念は全く持っていません。したがって日本の生活習慣で宗教上の妨げになることは一切ありませんでした。それどころかどんな日本食でも食べることができましたし、思う存分生活を楽しむことができました。休日や研修の終わった後、THKAのスタッフと一緒に食事をしたり、遊びに出かけたことも楽しい思い出になりました。また、毎朝早く起きて、宿舎で英語点字の解説書を欠かさず読みました。

日本での滞在中、私は技術研修を含めたたくさんのかんことを経験することができました。そして私の出会った人々は皆、礼儀正しく親切でした。おかげで何不自由なく生活を送ることができ、また有意義な研修を受けることができました。今後は、NAWBの点字出版技術を向上させ、ネパールの視覚障害者の福祉と文化向上に貢献したいと思います。（原文は英語）

本研修にご協力いただいた方々、ボランティアのみなさん、見学を快く引き受けてくださった盲学校、施設の皆様に心からお礼申し上げます。

技術指導のむずかしさ

点字出版局 森田 伸

ネパールのガイドブックを開くと、「6月～9月は雨季であり、この時期に行くのは避けた方がいい」と書いてある。まさにこの時期、私はネパールを訪れることになった。

バラ郡でのフィールドワークや統合教育校の視察にも参加したが、私のメインの仕事はNAWB点字出版所での技術指導である。出版所の設備は思ったよりも立派であった。とくに、点訳用のコンピュータや点字プリンタは高性能のものが導入されており、これに関する限りでは、私たちの職場よりはるかに進んでいるのに正直言って驚いた。しかし、当協会が導入した足踏み式製版機は、日頃の手入れが不十分であり、掃除や注油を毎日欠さず行うよう徹底した指導を執拗に行った。

彼らの仕事ぶりはと言うと、体内時計が私たちのそれより、かなりゆっくり進んでいるようで、まさにのんびり、というのが適切な表現であろう。しかし、決してやる気がないというのではなく、「どうしたらあなたがたのように早く仕事ができるのか」といろいろな質問を受けた。つまり方法論の問題である。機械の整備など技術的なことはきちんと教えることができるが、それだけでは私たちと同じように仕事をこなすことはできない。ただ、社会構造も生活習慣も違うこの国で、私たちと同じ方法論で仕事をこなすことには限界があるように感じられた。異国での技術指導の難しさをつくづく感じた次第である。

ガイドブックの記述通り、ヒマラヤの山々を望むことはできなかったが、多くの人に出会い、多くのことを考えた有意義な十三日間であった。



点字出版所スタッフに技術指導をする森田

ネパール視覚障害者の職域拡大を探る調査・研究

— 鍼灸の技術移転の可能性をめぐって —

当協会は、昨年11月28日から12月10日の日程で、標記をテーマにネパールへ調査団を派遣した。本調査は、日本における理療科教育をリードしてきた専門家4名の手により、ネパール盲人福祉協会(NAWB)の協力を得て実施された。以下、主任調査員として現地調査を担当した佐藤謙次郎氏が調査の概略を紹介する。



鍼治療をする筆者と井口調査員

1995年11月末から2週間、ネパールを訪れた。目的は、ネパールの盲人の職業として、鍼灸・マッサージを導入することの是非についての調査研究であった。一行は8人で、そのうち専門調査員は、鈴木雅夫氏、和出野充洪氏、井口立己氏と私の4人。その他に東京ヘレン・ケラー協会から井口理事ほかスタッフ3名。バンコック経由でカトマンズ空港に到着してから調査を終えてネパールを離れるまで、私たちは天候にも恵まれ、常に暖かく処遇され、言葉の違いさえなければ日本にいるのと変わらない感覚であった。

カトマンズでは、ネパール盲人福祉協会(その建物の中に、ヘレン・ケラー協会の援助によって設立・運営されている点字出版所がある)、ネパール盲人福祉協会の初代会長だった眼科医のブラサド先生のお宅、教育省の特殊教育委員会、トリブバン大学医学部付属教育病院、日本大使館などを訪問し、調査の目的を説明して、理解と協力をお願いした。

また、日本で鍼灸・マッサージの資格を取り、カトマンズで開業しているモンジュ・ダハールさんの治療院と、日本人鍼灸師である畑美奈菜さん

鬼木学園国際鍼灸専門学校講師
佐藤 謙次郎

の運営するOTT C(東洋医学専門学校)を見学した。特にダハール治療院では、実際に彼女と一緒に患者に対してはり治療をおこない、患者の疾病の状態や、鍼灸に対する感受性、信頼度などについて実践的な調査をおこなった。患者の疾患の程度は、外傷による半身マヒや小児マヒなど、日本ならば病院の整形外科で取り扱う程度のかかなり重症なものであった。また、鍼灸に対する信頼度は大変高く、痛みに対する感受性も日本人と大差はなかった。

畑さんのOTT Cは、ネパールの青年を対象に鍼灸・あん摩治療の教育を行う3年制の学校で、ネパール赤十字支部の協力を得て運営していた。しかし、カリキュラムなどの問題もあって、正式には学校として認可されていないとのことであった。それでも、たくましく教育と治療活動を続けており、今年、第一回の卒業生を送り出している。赤十字の建物の2階では鍼灸治療を、3階では日本式あん摩施術を外来患者に対して実習させており、患者数もかなり多いようであった。因に治療代は、現地の人は20ルピー(1ルピー:約2円)、日本人など外国人からは、20倍の400ルピーを徴収し、その収益をセンターの運営資金に当てているようであった。

カトマンズから、双発のプロペラ機でインドとの国境に近いバラ郡に飛び、CBRセンター(ヘレン・ケラー協会が支援している、農村における視覚障害者のリハビリテーションプログラムの拠点)、カレーヤ病院、ドゥマルワナ統合教育校などを見学した。カレーヤ病院では、おびただしい患者が建物の外にまで溢れるほど待っているのに、



CBRセンターで鍼治療をする和出野調査員

医療設備もスタッフもかなりお粗末で、地方における医療環境の劣悪さを痛感させられた。ドゥマルワナ校では、ヘレン・ケラー協会の援助によって建設、運営されている視覚障害児のための寄宿舎、ここから通学して勉強している盲児の学習の様子を見学することができた。

CBRセンターでは、あらかじめ集めておいてもらった患者に対して鍼灸治療をおこない、患者の疾患の種類や程度、鍼灸に対する認識度、信頼度などについて調査をおこなった。ここでも患者の疾病の状態や鍼灸に対する信頼度などは、カトマンズと同じようにかなり高いものであった。

次に、バスで陸路8時間あまり北上してポカラへと移動した。ポカラでは、アマルシン統合教育院を訪問し、9年生や10年生と話し合いの機会を持ち、卒業後の進路などについて各自の希望を聞くことができた。ネパールは10年制の教育制度で、小学校5年、中学校3年、高校2年である。卒業時に、高校卒業認定試験(SLC)を受験し、これに合格すると大学へ進むことができる。視覚障害者の場合、10年を卒業しただけでは適当な職がないので、大部分の者が大学へ進み、2年または3年～4年の大学教育を終えて、教員になっているケースが多い。多くは、リソースティーチャー(統合教育担当教師)として勤務することを希望している。もちろん普通校の教師として活躍している視覚障害者もいるが、中には、好きな音楽の能力を生かして歌い手になり、ラジオやテレビなどで活躍したいという学生もあった。彼らと話してみた感じは、みんな明るく積極性があり、しかも賢い学生ばかりであった。また、機会があれば、外

国に留学して勉強することを希望している者が大部分であった。

ネパールでは、総人口1,850万人(1992年)のうち、37万人の視覚障害者がいる。そのうち約2万5千人が学齢期に該当しているが、現在352人の児童・生徒が、25の統合教育校と1つの盲学校に在学しているに過ぎず、1.4%程度の盲児しか就学の機会を得ていないことになる。したがって、ごく恵まれた、優秀な視覚障害児だけが勉強していることになるのであろう。やがて就学率が高まり、生徒数が増えてくると職業的な面でのバックアップが必要になってくると考えられる。

ネパールでは現在、鍼灸・マッサージを規制する法律がなく開業者も極めて少ない。したがって現状では、鍼灸・マッサージの未開拓の処女地である。しかしながら私どもの調査によると、鍼灸・マッサージの治療を必要とする患者が多数存在するのである。鍼灸・マッサージが視覚障害者の適職であるということは、日本や韓国においてすでに立証済みである。したがってネパールにおいても、視覚障害者の職業として、これを速やかに取り入れることが良いのではないだろうか。ネパールの国民は、現状では疲労回復を目的としたマッサージを受ける余裕はほとんどなく、もっぱら治療的な施術が主になるであろう。したがって、心配していたようなカースト制度によるマッサージの障壁は解消するであろう。

経済的にも優れ、社会的にも誇りを持ってできる安定した職業である鍼灸・マッサージを、ネパールで視覚障害者の新しい職業として、是非推奨したいものである。そのための調査活動を引き続き継続して欲しいものである。



鍼の効果を患者に確かめる鈴木調査員

井口淳理事、ネパール王章を受章

ネパール王章は、ネパール国民のために尽力した人に与えられる勲章で、正式には「ゴルカ・ダクシン・バフ」と言う。意味は「国王の右腕」。ゴルカ王朝ビレンドラ・ネパール国王より直々に手渡される栄誉ある勲章である。今回、当協会海外盲人援護事業事務局長・井口淳理事が、過去10年間のネパール視覚障害者援護事業の功績によって、この栄に浴した。事務局スタッフにとっても感慨ひとしおである。

3月18日。首都カトマンズの中心に建つナラヤンティ王宮で「ゴルカ・ダクシン・バフ」の受章式が執り行われた。

午後3時、銃を構えた衛兵によって王宮正門のゲートが開かれ、われわれの車は王宮の敷地に進み出た。が、その場で夫妻のみ降車を許され、同行者は車外へ出ること、撮影することすらも禁じられたのである。この式には受章者本人しか列席できないのが原則らしい。われわれは事前に、理事が視覚障害者であることとコミュニケーションの円滑化のため、夫人およびスタッフの付き添いを認めるようネパール政府に要望していたのであるが、認められたのは夫人のみであった。さらにいざ国王の前に進み出る段になると、夫人の同行も許されなかったという。

ネパールは90年の民主主義革命によって、新憲法を制定し、国王の存在を「ヴィシュヌ神の化身としての宗教的権威と主権者としての政治的権力を合わせ持つ強力な統治者」から、「ネパール国とネパール国民の統合の象徴」へと大きく変化させた。しかし、国民の90パーセント近くがヒンズー教徒であり、国王と王妃の御真影が至る所に飾られ、催しなどの際、その前でヒンズー教に則った儀式が行われるのを見ると、大多数の国民は未だ国王を神聖な存在として崇めているだろうことは容易に察しがつく。

式は約1時間半にわたって行われ、その後、王族、軍関係者、政府高官が同席しティーパーティーが催された。夫妻が緊張から解放され喜びの笑顔で戻ったのは山々に夕陽が染まる暮れ間近であった。五角形の星と中央に太陽を象った勲章。深い信頼関係に支えられた年月が、おのずと王章の重



王章受章後のご夫妻－ナラヤンティ王宮で

みに伝えられてくる。式典で国王の傍らに列席していた王宮の事務総長が、受章後の祝宴で明かしたところによると、国王は「なぜ夫人と一緒にいるのか」と問われたそうである。国王自身の配慮がうかがわれる一言である。

ゴルカ・ダクシン・バフは、ネパール人に与えられる勲章であるが、今年は外国人として、井口理事の他、UNDP（国連開発計画）のネパール代表が受章した。これまでに、日本人では、文化人類学者で前日本ネパール協会会長の川喜田二郎氏やネパールで学校建設支援などの活動をしている元女優・山路ふみ子氏ほか数人が受章している。視覚障害者の受章は理事が初めてである。理事は「視覚障害者のことは視覚障害者自らの手で」の理念に基づき、事務局長として事業をけん引。この10年余の間に、点字教科書の製作・配布、統合教育校の開発による盲児童の就学促進、農村地域での職業的自立を目指したリハビリテーション、眼科診療所やビタミンA配布を中心とした失明予防など、この分野における先駆的・総合的な事業を展開してきた。また、昨年11月～12月には、ネパール視覚障害者の職域開拓のための調査を実施。鍼灸の技術移転の可能性を追求しはじめた。第2次活動のスタートである。

「猪突猛進型」を自認する井口理事であるが、この猛進がネパールの地に視覚障害者の自立を定着させつつある。自立の芽吹きを、強靱でしなやかに育成させること－王章を飾った胸の内に、切なる課題が刻み込まれた。

点字の故郷を訪ねて

ヨーロッパ3カ国スタディツアー

パリ盲学校の生徒であったルイ・ブライユが、点字を発明したのは1825年のことでした。この点字がそれまでの「線字」に代わり、世界に普及するにはその後いくつかの紆余曲折があります。

英国の医師トーマス・アーミテージは、失明という苦難を乗り越え、点字の優位性を確信して、その普及に尽力します。また、彼は世界最大の盲人福祉団体であるRNIB(王立英国盲人援護協会)を設立し、その後の盲人福祉に多大な貢献をしました。

今回のツアーは、両氏の足跡を縦糸に、ヨーロッパの盲教育と福祉の現状を横糸に、八日間で彩りよく織りあげる旅でした。費用は一人358,000円とけって安くはなかったのですが、全盲13名、弱視名、付添者などを含めて都合36名の大所帯による参加を得ました。

当協会の点字出版局は、28年前に英国から高速点字輪転機を導入して発足しますが、その際RNIBから多大な技術支援を受けました。今回の旅でも私たちは熱烈的な歓迎を受け、ランチに招待され、丸一日みっちりレクチャーを受けました。

今回のツアー参加者は、盲教育関係者が多かったためパリのGIAA(全仏視覚障害者知識人協会)やバランタン・アユイ協会、パリ盲学校では見学のブライユや点字に関する熱心な質疑応答が行われました。

途中ミュンヘンでは季節外れの雪に見舞われ、海外旅行ならではのトラブルも多かったのですが、驚くほど元気な94歳、御本団長のリーダーシップの下、日程通り4月4日に無事全員帰国することができました。

✂ ヨーロッパツアー旅程表 ✂

1996年	成田空港11:45発(JL-401)《所要時間13時間》
3/28(木)	ロンドン15:45着、フォーラム・ロンドン泊
29(金)	RNIB(ピーターバラ)視察訪問
30(土)	ロンドン市内観光
31(日)	ロンドン09:25発(LH-4017) ミュンヘン12:05着、市内観光、ペンテネル泊
4/1(月)	ミュンヘン11:00発(LH-4306) パリ12:35着、市内観光、コンコルド・サンテール泊
2(火)	GIAA/バランタン・アユイ協会視察訪問
3(水)	パリ盲学校視察訪問、(自由行動) パリ20:15発(JL-406)《所要時間11時間45分》
4(木)	成田空港15:00着、解散



ビッグベンを背景にテムズ河畔で記念撮影

ツアー参加者リスト(順不同)

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 【1】橋本美千穂(和歌山) | 【2】御本小一郎(和歌山、全盲) |
| 【3】下澤仁(神奈川、全盲) | 【4】下澤幸子(神奈川) |
| 【5】佐々木信(北海道、全盲) | 【6】佐々木玲子(北海道、全盲) |
| 【7】渡辺勇喜三(東京、全盲) | 【8】渡辺敬子(東京) |
| 【9】渡辺明(東京) | 【10】青木二郎(京都) |
| 【11】佐藤謙次郎(埼玉、弱視) | 【12】佐藤育子(埼玉) |
| 【13】栗本久夫(群馬、全盲) | 【14】栗本梯子(群馬) |
| 【15】藤原実(宮城、弱視) | 【16】藤原朋子(宮城) |
| 【17】竹田功(福島、全盲) | 【18】前田忠男(福島、弱視) |
| 【19】高橋恵子(千葉、全盲) | 【20】高田悦子(千葉) |
| 【21】山田せつ子(千葉) | 【22】中村みよ子(愛知、全盲) |
| 【23】本田幸子(京都、全盲) | 【24】舩川敦子(京都、全盲) |
| 【25】古賀副武(兵庫、全盲) | 【26】古賀恵依子(兵庫、弱視) |
| 【27】古賀瑠美子(兵庫、弱視) | 【28】鴨みゆき(兵庫) |
| 【29】阿佐博(東京、全盲) | 【30】小林信(東京、聾者) |
| 【31】後藤元亮(東京、弱視) | 【32】佐藤實(東京) |
| 【33】堀聖一(東京) | 【34】吉良厚子(東京) |
| 【35】福山博(東京ヘルパー協会) | 【36】木村将宏(近畿日本ツアーリスト) |

ネパール・スタディツアーを実施します

12月24日～1月3日にかけて、視覚障害者を対象に、恒例のヘレンケラー・ツアーを実施します。今回はカトマンズを南下し、北上する欲張った企画です。主要プログラムは、カトマンズのネパール盲人福祉協会、インド国境沿いのバラC B Rフィールドワーク、バラ郡統合教育校見学、チトワン国立公園の野生の王国体験、釈迦生誕の聖地ルンビニでのサンセット。もちろん、ヒマラヤが眼前にそびえ立つネパールの景勝地・ポカラ、カトマンズや古都バクタプール、帰りはバンコクと盛りだくさんです。ネパールの視覚障害者事情とほんとうのネパールを体験したい方、是非ご参加ください。手引きのためのボランティアも募集しています。(視覚障害者の単独参加がある場合)

参加費用：383,000円(全食付)

問合わせ：海外盲人援護事業事務局 佐々木秀明

☎ 03-3200-0810

ネパールでのボランティア活動

赤井美佐子さんが昨年8月末から9月にかけて1週間、徳淵千絵子さんは10月から今年の6月まで、染谷紀子さんが1月から3月にかけて、それぞれご自身の計画の下、ネパールに渡り、当協会のカウンターパートであるネパール盲人福祉協会（カトマンズ）のボランティアとして活動されました。活動内容は、スタッフに対する日本語教授と点字教科書製作のお手伝いです。ボランティアの方々は、このネパールでのボランティア活動を通して、それぞれに貴重な経験をされ、異文化交流のすばらしさを実感したようです。事務局一同、無事の帰国に胸を撫で下ろすとともに、ボランティアの方々の熱意ある活動、ネパールという国に真摯に向き合う姿に感激しています。ボランティアのみなさん、ありがとうございました。

デレイ デレイ ダンニャバード！

徳淵 千絵子

ゆっくりと日は昇り、穏やかな一日がまた始まろうとしている。朝霞の中、人々の生活の音が聞こえ始める。雨季前で日中は暑くなるものの、朝のうちは随分涼しい。ここはネパール・カトマンズ。こちらでの暮らしも早や7カ月目、日本を出てすぐの頃は初めて経験することばかりだったのが、気が付けばすっかり自分の日常となっていた。

1995年10月、初めてカトマンズの地に立つ。ネパール盲人福祉協会（NAWB）のアルヤール事務長はじめ職員の方々、東京ヘレン・ケラー協会（THKA）現地連絡員シュレス氏が空港で私を迎えてくださった。迎えの車は私たちを乗せて砂塵の中を走る。通り過ぎていく初めて見る街の風景は、私が想い描いていたイメージととても近かった。レンガ造りの建物、女性達の原色のサリー、道を横切っていく牛……その風景の中に自分がいることがとても嬉しく、これから始まるネパールでの日々に胸が躍った。

翌日から私のNAWBでのボランティア生活が始まる。日本語教師ボランティアということではあるが、私自身日本人だとはいっても日本語について専門的に学んだこともなければ実際に教えた経験もない。日本から持参した本を参考に独自のやり方で授業を進めた。対象は主にNAWB関係者と彼らの身内や友人達。最初はかなりぎこちなかった授業も、日を追う毎になんとかそれらしくなっていく。下手な素人授業だったにも拘わらず、皆さん本当に熱心で呑み込みも早く、逆に私



点字出版のボランティアをする徳淵さん

の方が皆さんから学ばせて頂くことの方が多かった。日本語教授以外にも点字出版所の仕事など手伝わさせて頂いたが、それら全てを含むNAWBの日々は、いつも私を気遣ってくれ、時にネパリジョークで笑わせてくれた陽気で優しいNAWBの皆さんのお陰で本当に楽しく充実していた。

日本へ帰る日が迫りつつある今、時が過ぎていくのと同じ速さでこの国を好きになっていった自分を感じている。私のネパールでの生活は、NAWBとステイ先のネパリ家族との日々を抜きには語れない。日本での生活に比べると確かに不自由な点もあったけれど、どんなことも全て、あるがままのネパールが私は大好きだ。大変お世話になったNAWBの皆様とTHKAの皆様にはもちろん、ペンションサクラの皆様、ボランティア仲間の染谷紀子さん、そして私のネパリ家族SHAKYA家の皆様、最後に遠い日本で応援してくれた私の家族にめいっぱいの感謝の気持ちを捧げたいと思います。デレイ デレイ ダンニャバード！

祈りの国・ネパール

染谷 紀子

私がこのボランティアを知ったのは、2年前の事。まだ看護婦として病院に勤務し、余暇を利用してのインド・ネパール旅行を終えた直後だった。当然のようにNGOに興味を持ち、情報を集め、出会ったのがTHKAだったのだ。大好きなネパールに行ける！ しかもボランティアができる！ 忙しい病棟ともお別れね、など思いながら2年ぶりのカトマンズに到着。すでに活動していた徳淵さんとNAWBスタッフの歓迎を受けて、私の生活は始まった。

テキスト作りを手伝わせてもらい、その後、日本語の授業。英語が流暢でない私はとたんに言葉の壁にぶち当たり、語学を専門に勉強してない私に何ができるのか?!と悩んだ。けれど、そんな私にユーモアで接し、授業に参加してくださったアルヤールさん、テキスト作りでフォローしてくださったNAWBのスタッフ、そして徳淵さんとの語らいの中、2カ月後、心身共にひとまわり大きくなった私がいた。東京の忙しさで見失った、人

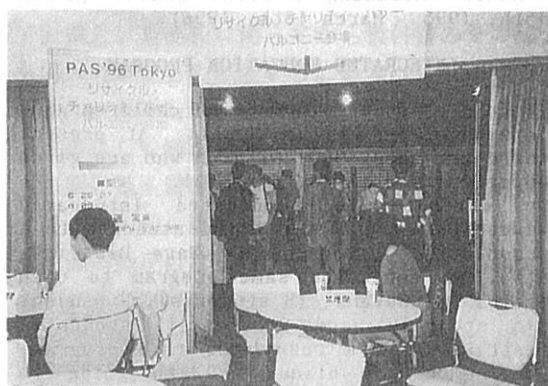


スタッフに日本語を教える染谷さん(左)と徳淵さん

対人や家族のつながり、働くという本当の意味、現代の教育などについて深く考えたすばらしい日々だった。ボランティアをした事により、私自身が救われ、私自身が幸福になってしまった。それに、日常生活での数々の笑い話も大切な宝物。旅立つ際お世話になったTHKAの皆様、NAWBの皆様、私のおしゃべりに付き合ってくれた徳淵さん、本当にありがとうございます。土埃とバザール、チャイとはにかんだ笑顔の人々、そして祈りの国・ネパールへまた行きたいです。

回 大盛況だった「チャリティ・バザー」

6月26日～28日に池袋サンシャインシティで開催された「プロオーディオ総合機器展'96」において、当協会の運営による「チャリティ・バザー」を実施しました。本機器展は毎年「日本プロフェッショナルオーディオ協議会」が主催。日本のプロフェッショナルオーディオ業界が総結集して最新機器を展示する催しです。当協会は過去2回にわたり組織委員会のご協力により「チャリティ・バザー」を運営してきました。本年も組織委員会のご支援の下、開場の一隅をお借りして、本バザーを実施。販売品は、協議会加盟各社から提供された、往年の名器、マイクやスピーカー周辺機器などで、マニアにとっては喉から手が出るほどの魅力ある品々です。開場前には列ができ、開場と同時にどっと客が押し寄せ整理がつかない状態。運営スタッフもうれしい悲鳴を上げるほどの大盛況でした。チャリティ収入も上々で、このような会を与えて下さった主催者、提供各社および事務局の皆様、に、紙上から厚く御礼申し上げます。



販売品提供各社（順不同、敬称略）

(株)テクニランド、ヒビノ(株)
東和インターナショナル(株)、バップ(株)
(有)ディーアンドエーミュージック
(株)ファーストエンジニアリング
ソニー(株)ブロードキャストカンパニー
オーディオプロセッシング・テクノロジー(株)
ハーマンインターナショナル(株)

AID PROJECT IN NEPAL FISCAL 1995 (1/4/1995 - 31/3/1996)

BARA CBR PROJECT

Almost 7 years have passed since Bara CBR (Community-Based Rehabilitation) Project has started in Bara District in Narayani Zone. Last year Bara CBR center conducted follow-up program in whole 105 villages there. It provided 88 newly identified BVI (Blind and Visually Impaired) persons with counseling, mobility and daily living skill training. Regarding 470 BVI persons who have already received the training, Bara CBR Center mainly gave them vocational training and encouraged them to be self-reliant providing income-generating loan. Also, Bara CBR staff were given training to develop the CBR Project.

With a constant effort of NAWB (Nepal Association for the Blind), Bara CBR staff and THKA (Tokyo Helen Keller Association), there is an increasing number of BVI persons who were benefited by Bara CBR Project.

BRAILLE BOOK PRODUCTION

NAWB Braille Printing House produced 2,532 braille textbooks for school education from 1st grade to 10th grade. Then 2,353 textbooks were distributed to 339 Blind children at 26 Integrated Education schools including 1 blind school (March 15th, 1995 - March 13th, 1996).

INTEGRATED EDUCATION PROGRAM

There are about 30,000 blind children aged between 6 and 15 in Nepal. At present there are about 340 children who are given opportunities to go to school.

We extended and conducted Integrated Education Program for blind students to 4 schools (22 students) in Bara District. Also, we conducted same program to each school in Rautahat (8 students), Rupandehi (15 students) and Gorkha (15 students) District. As a result of this program, the number of blind children going to school has been increasing year by year. To develop the program, NAWB conducted 2 workshops and 1 training for the resource teachers of Integrated Education schools.

PRIMARY EYE CARE AND EYE CLINIC

At the Eye Clinic of Bara CBR Center, 4 ophthalmic assistants are being stationed and rotating to care eye patients there. And itinerant ophthalmologists are treating the patients without any charge as well.

4,863 patients were treated there from March 15th, 1995 to February 12th, 1996.

Bara Eye Clinic has been contributing to prevention of eye disease for the local people who had hardly received the treatment because there was not any eye hospital near their houses.

To develop the prevention of eye disease, Bara CBR Center called ophthalmologists there and conducted Primary Eye Care Workshop twice for the local people. And the center distributed 16,448 capsules of Vitamin A to 4,159 children. It also conducted itinerant lecturing at 7 schools for 1,794 students and local people to spread the knowledge of nutrition and hygiene focusing on taking Vitamin A.

SIGN OF AGREEMENT

To extend Aid Project for the Blind in Nepal for next 3 years, THKA signed General Agreement with SWC (Social Welfare Council) and Project Agreement with NAWB on December 1st, 1995.

RESEARCH OF THE OCCUPATION FOR THE BLIND

From November 28th to December 10th, 1995, THKA sent its director with 4 physical therapists to Nepal to research into the occupation for the blind there. They observed Integrated Education schools, hospitals and Education Ministry. And they conducted tentative therapy in Bara District. They researched into the potential of technical introduction of massage, acupuncture and moxibustion to Nepal.

TRAINING OF BRAILLE BOOK PRODUCTION

From January 7th to April 7th, 1996, THKA called Mr. Kiran Paudel, NAWB Education and Production Administrator to THKA Printing House and gave him training of braille book production technique. Also, It gave him opportunities to observe blind school and welfare facilities in Japan.

DECORATION OF GORKHA DAKSHIN BAHU IV MEDAL

On March 18th, THKA Director was decorated Gorkha Dakshin Bahu IV Medal by His Majesty the King of Nepal. The Medal has a meaning of "The right arm of the King." The achievement of Aid Project for the Blind in Nepal conducted by THKA for last 10 years was so highly appreciated that its director was awarded the medal.

1995年度事業報告(1995年4月1日-1996年3月31日)

1. 視覚障害者リハビリテーション(CBR)事業

チラニ県バラ郡においてCBR事業を継続実施した。本事業は本年6月で開始7年を経過する。昨年度はバラ郡全域105カ村のフォローアップを行い、新たに発見された視覚障害者88名に対し更生相談、歩行・日常生活技能訓練を実施した。また、すでに訓練を受けている470人の視覚障害者に対しては、職業訓練を中心にサービスを提供し自活資金貸し付けによって自立を促した。統合教育推進事業、失明予防事業も精力的に展開した。さらにスタッフ研修もおこない、CBRの向上を図っている。

2. 点字出版事業

初等～中等教育(第1～10学年)課程の点字教科書2,532冊を製作し、ネパール全土の統合教育校26校339名の盲児童(盲学校1校を含む)に2,353冊を配布した(1995年3月15日～1996年3月13日)。また、点字カレンダー400部を作成し、統合教育校や関連施設に配布した。

3. 統合教育事業

①バラ郡の統合教育校4校(盲児童22名)にて、引き続き統合教育プログラムを実施した。また、ロータート(盲児童8名)、ルパンディヒ(盲児童15名)、ゴルカ(盲児童15名)各郡の拠点統合教育校においても同様のプログラムを実施した。本統合教育事業により盲児童の就学は年々増加している。

②統合教育の質的向上を目的に、「全国統合教育講習会」を開催した。本講習会には、全国の統合教育校から校長、担当教師29名が参加し、統合教育の運営について討議が重ねられた。(1996年2月18日～21日)

③バラCBRセンターにおいてバラ郡統合教育講習会を開催した。(1995年5月18日～20日)

④NAWBにおいて4名の統合教育担当教師研修を実施した。(1996年2月25日～4月20日)

4. 失明予防と眼科診療

CBRセンター眼科診療所において巡回眼科医と4名の眼科助手により無料診療を行った。1995年3月15日～1996年2月12日までの間に受診した総患者数は、4,863名である。当診療所は、眼科病院が無く放置状態にあった地域住民の失明予防に大きく貢献している。また、CBRセンターにおいて眼科医を講師に招き、地域住民を対象に「失明防止講習会」を2回開催した。さらに、4,159名の児童に対し16,448カプセルのビタミンA剤を配布、バラ郡内7校1,794名の児童に対し巡回学校眼科検診、村落単位の巡回講習も実施し、ビタミンA摂取の重要性を中心に、栄養知識や公衆衛生知識の普及を図った。

5. 協定書の調印

上記、ネパール視覚障害者援護事業を3年間継続延長するため、1995年12月1日ネパール全国社会福祉協議会(SWC)と総合協定書を、ネパール盲人福祉協会(NAWB)と事業協定書を締結した。

6. 技術指導と事業管理

点字出版局の協力を得て、NAWB点字出版所の技術

指導を実施した。また事務局スタッフを派遣し事業管理をおこなった。

①1995年4月1日～4月13日：事務局スタッフ2名(事業管理)

②1995年11月28日～12月10日：事務局長、事務局スタッフ2名(職業調査・事業管理)、出版局技術専門家1名(技術指導)

③1996年3月16日～3月24日：事務局長(王章受章)、事務局スタッフ2名(事業管理)

7. 視覚障害者の職業調査

1995年11月28日～12月10日の日程で「ネパール視覚障害者の職域拡大」をテーマに、事務局長他4名の理療専門家を派遣。統合教育校、病院、教育文化省などを視察、バラ郡においては試験的施術を行い、鍼灸の技術移転の可能性を調査した。

8. 点字出版技術研修

1996年1月7日～4月7日の3カ月間、NAWB点字出版所の技術向上を目的に、NAWB教育・点字印刷課長キラン・パウデル氏を招聘し、当協会にて点字出版技術指導を行った。併行して、盲学校や福祉関連施設などの視察も実施した。

9. ネパール王章受章

3月18日、事務局長がネパール国王より「ゴルカ・ダクシン・バフ王章」を受章した。本勲章は、「国王の右腕」と称せられ、過去10年間のネパール盲人援護事業の実績に対し授与されたものである。

10. スタディ・ツアーの実施

本ツアーは異文化に触れながら、他国の視覚障害者福祉の現状視察と交流を図ることが目的である。

①95年4月29日～5月6日の日程で「ブラジル・スタディ・ツアー」を実施。サンパウロにある視覚障害者のための鍼灸マッサージ師養成施設「鬼木東洋医療専門学校」を中心に視察を行った。

②96年3月28日～4月4日の日程で「点字の故郷を訪ねて」をテーマに、ヨーロッパ3カ国スタディ・ツアーを実施。ロンドンの英国王立盲人援護協会(RNIB)、パリのバランタン・アユイ協会、パリ盲学校などを視察した。

11. 広報・募金活動

①7月「愛の光通信」第10号を発行して広報・募金活動を行った。

②9月30日～10月1日、日比谷公園で開催された「国際協力フェスティバル」に参加。ボランティアの協力を得て、写真展や報告書の配布を精力的に行った。

12. ボランティアの派遣

日本語講師および点字出版作業のボランティアをネパール盲人福祉協会に派遣。

①赤井三佐子さん(1995年8月30日～9月6日)

②徳淵千絵子さん(1995年10月15日～1996年6月)

③柴谷紀子さん(1996年1月17日～3月16日)

1995年度収支計算書

自 平成7年4月1日
至 平成8年3月31日

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
	円		円
事 務 費	2,387,681	寄 付 金 収 入	14,185,778
賃 料 費	740,000	協 賛 金 収 入	214,500
旅 費	31,735	助 成 金 収 入	9,422,000
消 耗 品 費	130,938	募 金 収 入	4,549,278
印 刷 製 本 費	324,807		
役 務 費	600,587	事 業 収 入	264,000
会 議 費	113,182	販 売 収 入	264,000
借 料 損 料 費	266,232		
雑 費	180,200		
事 業 費	12,600,885	雑 収 入	143,392
海 外 出 張 費	3,563,747	雑 収 入	143,392
海 外 援 助 費	9,037,138		
小 計	14,988,566		
当 期 繰 越 金	△395,396		
合 計	14,593,170	合 計	14,593,170

貸借対照表

平成8年3月31日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
	円		円
流 動 資 産	8,131,777	繰 越 金	8,131,777
現 金	44,191	前 期 繰 越 金	8,527,173
預 金	8,011,086	当 期 繰 越 金	△395,396
仮 払 金	76,500		
資 産 合 計	8,131,777	純 財 産 合 計	8,131,777

海外援護事業記録

(1995 / 6 - 1996 / 5)

- 95年 6月 *国際ボランティア貯金配分金決定 (6/20)
 8月 *「愛の光通信 No. 10」発行
 *日本語講師ボランティア赤井三佐子さんをN
 AWBに派遣。 (8/30-9/6)
 9月 *日比谷公園で開催された「国際協力フェスティ
 バル」に参加。 (9/30、10/1)
 10月 *日本語講師・点字出版ボランティア徳淵千
 子さんをNAWBに派遣。 (10/15-6/23)
 11月 *「ネパールの視覚障害者の職域拡大を調
 査・研究—鍼灸の技術移転の可能性をめぐ
 っ」をテーマに現地調査を実施。佐藤謙次郎
 氏、鈴木雅夫氏、和出野充洪氏、井口立己氏
 を派遣。 (11/28-12/10)
 *技術指導・事業管理：井口、佐藤、佐々木、阿南
 (11/28-12/10)
 12月 *ネパール全国社会福祉協議会(SWC)、NAWB
 と3年間の協定締結。 (12/1)
 *「ネパール上陸10周年記念祝賀会—第2期活
 動に向けて」を開催。 (12/15)

- 96年 1月 *NAWB点字出版・教育課長キラン・パウデル
 氏、3カ月技術研修のため来日。 (1/10)
 *日本語講師・点字出版ボランティア染谷紀子
 さんをNAWBに派遣。 (1/17-3/16)
 3月 *井口理事、「ネパール王章」受章のためカト
 マンズを訪問。3月18日受章。 (3/15-24)
 事業管理二名派遣：佐々木、阿南 (3/15-24)
 *ヨーロッパ3カ国スタディツアー(3/28-4/4)
 4月 *キラン・パウデル氏離日。 (4/7)

95. 8. 28 福祉新聞 一活動紹介
 95. 12. 25 東京新聞(朝)「NGO通信」一活動紹介
 96. 1月号「視覚障害」一活動紹介
 96. 1. 28 NHK「視覚障害者のみなさんへ」一職業調査紹介
 96. 2. 29 毎日新聞(朝)「ひと」一井口理事紹介
 96. 3. 9 テレビ東京「素敵にこだわり」一活動紹介
 96. 3. 29 毎日新聞(朝)「ネパール王章受章」
 96. 春号「にってんフォーラム」一ネパール王章受章

寄付者ご芳名 (五十音順・敬称略) 1995年4月1日 - 1996年3月31日

桂田 純一様、坂本 妙子様より、それぞれ100万円のご寄付を賜りました。
心より厚く御礼申し上げます。

(個人)

青木 ヒサ	青木 貞子	秋山 恭子	浅倉 久志	荒木 薫
在田 一則	有本 成子	五十嵐 信敬	井口 立己	池田 富夫
池田 義明	石井 芳重	石川 はな	石川 芳秀	池田 昌宏
石原 幸栄	石光 貞子	和泉 雅子	市角 誠	井出 国男/イミ子
伊藤 啓子	伊波 静男	今泉 新治	井村 恵津子	上野 伊律子
上村 健次	魚住 源次	内山 武志	遠藤 利三	大内 三良
大岡 信	大河原 正子	大島 秀夫	大橋 東洋彦	岡野 マスミ
岡山 美恵子	尾形 仍	小川 元	小河 静	小野 日央
小幡 欣治	折戸 正明	賀川 友吉	加来 典子	片桐 武昭
勝又 誠子	加藤 晃	金田 一郎	金田 正一/敏子	川越 利信
川崎 力	河田 満	汲田 冬峯	靱谷 清孝	栗田 亘
黒田 愛子	肥塚 隆	肥塚 美和子	後藤 良一	小林 一弘
森 愛子	紺野 敏雄	斉藤 ミサ	三枝 礼子	佐々木 信
佐藤 利村	佐藤 久夫	佐藤 睦子	品田 雄吉	下沢 仁
白井 雅人	末吉 恵里	菅原 温子	杉野 義次	鈴木 勝利
鈴村 豊春/はる子	高木 正治郎	高橋 輝雄	竹村 実	蓼 胡競
田中 さ加恵	田中 茂	田中 徹二	谷内 正史	玉谷 都千恵
田村 和凡	千田 耕基	辻 三郎	寺島 アキ子	照井 博
当津 純一/順子	豊川 真紀	鳥羽 節	鳥山 由子	中川 みどり
中瀬 栄之助	中西 由起子	長島 好夫	西片 義保	野口 三男
橋本 三郎	橋本 時代	林 鳳紘	端山 智弘	馬場 のぼる
原田 美男	樋口 真枝子	肥後 信之	檜山 寿子	福原 ササノ
福山 博	藤井 誠司	藤本 和美	星野 彰	巻島 完次/久子
杉尾 宏之	松下 信雄	松谷 まき子	松田 節子	松田 千恵子
松葉 幸子	松村 太郎	丸山 雄一郎	三浦 綾子	水野 まち子
水間 保実	見元 利江	宮崎 勇	宮原 満洲男	目黒 千代子
森川 政之衛	森村 誠一	安平 聖弘	薮内 清	山内 潤子
山崎 邦夫	山田 あき子	山田 元子	山辻 英也	山本 景子
山本 美穂子	湯浅 寛	吉田 旬	吉田 登輝夫	吉村 弘子
米田 昌徳	若狭 裕二	若林 弘子	渡辺 直明	

(団体)

(株)アドベンチャーロード	医道の日本社	エアメールサービス
NECクリエイティブ募金箱	(有)大本印刷	岐阜盲学校高等部生徒会
暁星学園高等学校	近畿日本ツーリスト(株)	岐阜県聴覚障害者リハビリテーションセンター学友会
小林動物病院募金箱	全国病院理学療法協会	高松キワニスクラブ
鶴嶺小学校	福島県視力障害者協力会	間宮製作所(株)
武蔵野女子学院生徒会		

(物品寄付)	石川 純子	小平 嘉清	佐藤 利村	土屋 浩美
	中柴 治義	中村 元生	マルマン株式会社	

温かいご支援ありがとうございました

● チャリティ公演「朗読と音楽でつづる宮沢賢治の世界」 ●

1996-8月24日(土) 武蔵野芸能劇場で-

時代の閉塞、あるいは「出口なし」—— そんな時の巡り合わせの中で、宮沢賢治という人と出会う。たちどまる。佇む。——

賢治は、空気や星や草や岩石と近く生きて、文学や農作業や信仰と親しく生きて、欧州の音楽や西域の言葉ともなじんで生きて、そうして姿たちのちがうもの、こころもちのちがうものとの間に、入口を見つけたにちがいありません。

入口から出口へ、出口から入口へ—— 果てしない物語という名の林檎の皮が、いま剥かれ始めようとしています。

日程: 8月24日(土)

午後2時、午後6時30分(2回公演)

会場: 武蔵野芸能劇場(東京都武蔵野市)

交通: JR中央線・地下鉄東西線三鷹駅徒歩1分

出演: 朗読-白坂道子、深沢彩子

音楽-土井啓輔(尺八)、ガムラン

入場料: 前売り 3,000円、ただいま発売中。収益はネパールの盲人援護事業に使われます。

予約・問合せ

東京ヘレン・ケラー協会

海外盲人援護事業事務局 ☎03-3200-0810

東京ヘレン・ケラー協会

オリジナルテレホンカード

頒価2,000円(2枚セット)

TELEPHONE CARD 50



アジアの盲人に愛の灯を

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局 TEL03-3200-1310



ヘレン・ケラー女史のポートレートと、ヒマラヤを背景に日本の盲人がトレッキングを楽しんでいる様子をデザインした、オリジナルテレホンカード2枚組。とりわけ女史の自筆サイン入りの写真は貴重です。本テレホンカードの純益は、すべてネパールの盲人援護に使われます。

募金のお願い

ネパールにおける失明防止と視覚障害者援護をさらに充実するために、募金をお願い致します。寄付金のご送金は、下記口座をご利用下さい。

郵便振替: 00150-5-91688

銀行口座: さくら銀行新宿支店(普)5101190

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第217条第1項第5号および、法人税法施行令第77条第1項第5号にかかげる社会福祉法人でありますので、当協会に対するご寄付は、所得税法第78条第2項第3号、法人税法第37条第3項第3号の規定が適用され、税法上の特典が受けられます。

編集後記

夏になりました。海でトウモロコシなどをほおばってみたいところですが、2年ぶりのチャリティ公演「朗読と音楽でつづる宮沢賢治の世界」の準備におおわらわです。年末には「欲ばりスタディ・ツアー」も企画していますし、またまた、忙しい日々が続きそうです。

本文でもお伝えしたように、海外担当理事の井口淳が「ネパール王章」を受章しました。ネパールからの勲章だけに、私たちスタッフも活動への評価が実感でき大変喜んでます。長い年月にわたり当協会の活動を支援して下さいの皆様のおかげです。感謝申し上げます。

不況や低金利の影響もあって活動資金に苦慮しております。今後とも変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。(佐々木)



TOKYO HELEN KELLER
ASSOCIATION

Established 1950

14-4, Ohkubo 3-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 169, Japan

発行: 社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会

海外盲人援護事業事務局

住所: 〒169 東京都新宿区大久保3-14-4

TEL: 03-3200-1310 FAX: 03-3200-2582